

保育所建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

た け べ い せ き
竹 部 遺 跡

2018年3月

社会福祉法人 守里会

高松市教育委員会

例 言

- 1 本報告書は、保育所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、竹部遺跡の報告を収録した。
- 2 発掘調査地並びに調査期間は次のとおりである。
調査地 高松市上林町字竹部 61 番 1 ほか
発掘調査 平成 29 年 2 月 6 日～3 月 7 日
整理作業 平成 29 年 5 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
調査面積 約 478m²
- 3 発掘調査から報告書の編集まで高松市教育委員会が担当し、その費用は社会福祉法人 守里会が全額を負担した。
- 4 発掘調査は高松市創造都市推進局文化財課非常勤嘱託 新井場 萌が担当し、文化財専門員 高上 拓が補佐した。整理作業は同非常勤嘱託 上原 ふみが担当し、高上が補佐した。
- 5 挿図として 1/25,000 の都市計画図を一部改変した。
- 6 標高は海拔高を表し、座標は国土座標第 IV 系（世

界測地系）に従った。また、方位は座標北を示す。
土層及び土器観察の色調表現は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・一般社団法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。

- 7 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。

SD：溝 SK：土坑
SP：柱穴 SX：性格不明遺構
SB：掘立柱建物

- 8 遺物の実測図のうち、土器は 1/4、石器は 1/2、遺構の縮尺については各図面に示している。
- 9 調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。
- 10 本報告における遺構番号は、調査時に付与されたものを原則使用する。本報告書と調査諸記録間での齟齬を避けるためである。

目 次

第 1 章 調査の経緯と経過		第 2 節 第 1 調査区	5
第 1 節 調査の経緯	1	第 3 節 第 2 調査区	12
第 2 節 調査の経過	1	第 4 節 第 3 調査区	18
第 2 章 地理的・歴史的環境		第 5 節 第 4 調査区	19
第 1 節 地理的環境	2	第 6 節 擁壁設置部	19
第 2 節 歴史的環境	3	第 4 章 まとめ	20
第 3 章 調査成果		遺物観察表	21
第 1 節 基本層序	5		

挿図目次

第 1 図 調査区配置図	1	第 12 図 第 2 調査区 SK・SD09 平・断面図	12
第 2 図 竹部遺跡の位置	2	第 13 図 SD02・03 平・断面図 (S=1/60)	13
第 3 図 周辺遺跡分布図	4	第 14 図 第 2 調査区 SP 平・断面図	15
第 4 図 遺構配置図	6	第 15 図 第 2 調査区 SX49 平・断面図	15
第 5 図 第 1 調査区基本層序	7	第 16 図 第 2 調査区 SX 平・断面図	16
第 6 図 第 1 調査区 SK 平・断面図	7	第 17 図 第 2 調査区 出土遺物	17
第 7 図 第 1 調査区 SD 平・断面図	8	第 18 図 第 3 調査区基本層序	18
第 8 図 第 1 調査区 SP 平・断面図	9	第 19 図 第 3 調査区 SK 平・断面図	18
第 9 図 第 1 調査区 SB 平・断面図	10	第 20 図 第 3 調査区 出土遺物	19
第 10 図 第 1 調査区 SX 平・断面図	11	第 21 図 第 4 調査区基本層序・SD 平・断面図	19
第 11 図 第 1 調査区 出土遺物	11		

挿写真目次

写真 1 SB60 完掘状況（東から）	9	写真 3 SD09 完掘状況（南西から）	14
写真 2 SD02・SD03 完掘状況（西から）	14	写真 4 SD02・SD03 完掘状況（東から）	19

第1章 調査の経緯と経過

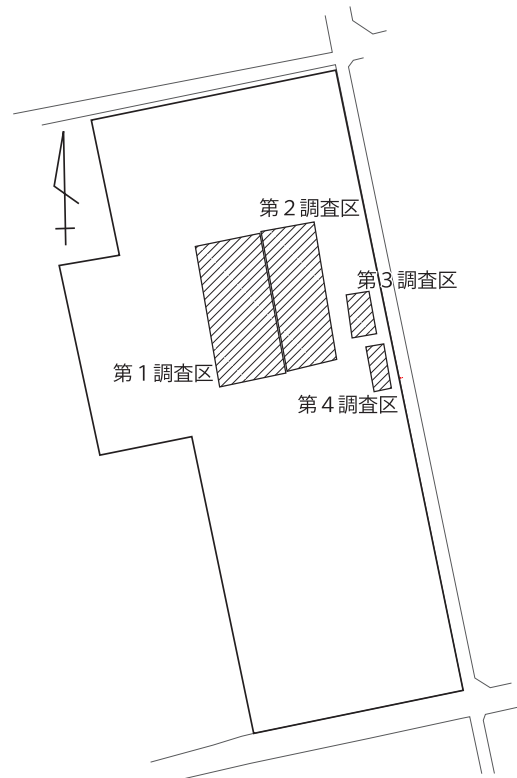
第1節 調査の経緯

本調査地は社会福祉法人守里会の保育所建設予定地にあたり、周知の埋蔵文化財包蔵地「中林遺跡」に近接するため、事業者より試掘調査依頼を受け、高松市教育委員会（以下、本市教委）が試掘調査を実施した。

その結果、設定したトレンチの一部で黒褐色遺物混じりシルト層を基盤としたピット等の遺構が複数基礎確認された。遺構埋土は灰白色系シルトが主体であった。遺物は中世に所属すると考えられる土師器片が散見されたことにより、同時代の遺構が面的に広がっている可能性が想定された。また、基盤層内にも、時期不明であるが土器細片を含んでいた。

この調査によって本事業地の一部において埋蔵文化財の包蔵状況が確認されたため、当該範囲は周知の埋蔵文化財包蔵地「竹部遺跡」として登録された。

事業着工に先立ち、事業者より平成29年1月4日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘届出が本市教委に提出された。これを取受の上、同日付け（高文財第930号）で本市教委から香川県教育委員会に進達した。その後、平成29年1月12日付けで県教委より工事着手前に発掘調査を行う旨の行政指導（28教生文第21699-2号）が通知されたことを受け、平成29年1月16日付け（高文財第967号）で本市教委より同内容を事業者に伝達した。事業者と本市教委は協議の上、「上林町保育所建設工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」に関する協定書を締結し、平成29年2月6日より発掘調査を開始した。



第1図 調査区配置図

第2節 調査の経過

調査にあたっては、設計図面を精査し、遺構面上に保護層が確保できない建物基礎部（第1・第2調査区）、浄化槽設置部（第3調査区）、駐輪場設置部（第4調査区）、擁壁設置部の計5カ所を発掘調査した。擁壁設置部については狭隘なため、施工の際に調査員が工事立会の対応をした。

なお、建物基礎部については南北方向の既存境界構造物を維持したまま調査を行ったため、東西で第1・第2調査区と分かれる。また、建物基礎部の中でも保護層が確保できる箇所については調査対象から除外した。

調査については、平成29年2月6日から同年3月7日に本事業地内にて発掘調査を実施した後、高松市埋蔵文化財センター内にて記録図面・遺物等を保管の上、同年5月1日から整理作業を開始し、平成30年3月31日に完了した。

第2章 地理的・歴史的環境

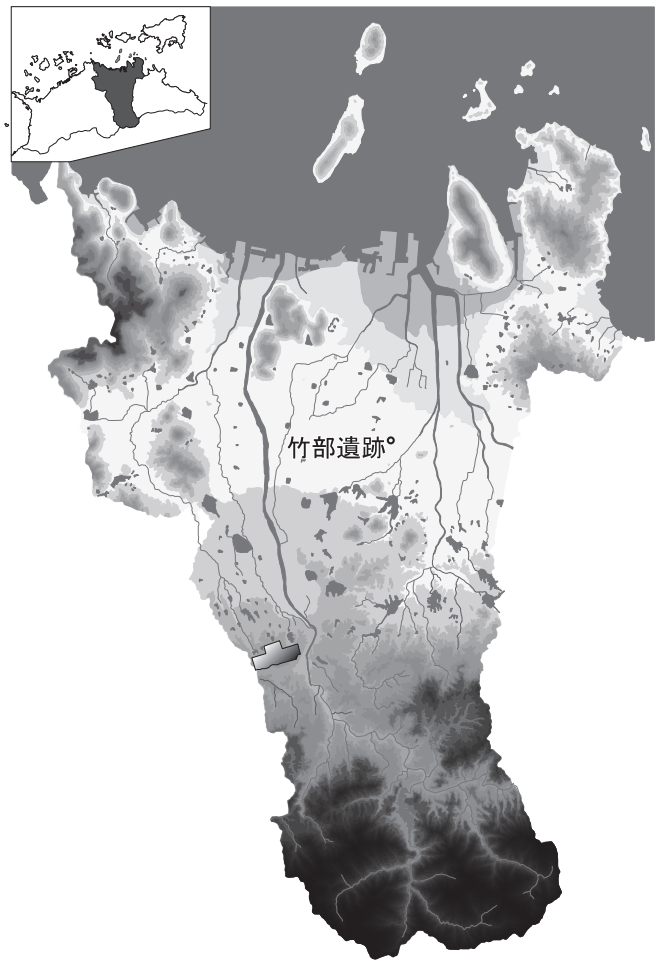
第1節 地理的環境

高松平野は香川県のほぼ中央部の瀬戸内海沿岸に位置し、低い山塊に囲まれている。讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。

高松平野には西から本津川・香東川・春日川・新川等の河川が見られ、讃岐山脈から瀬戸内海へと北流している。なかでも香東川は平野の形成に大きな影響を及ぼしており、現在の春日川以西の大部分は香東川によって形成された沖積平野とされる。現在、石清尾山塊の西側を直線状に流れる香東川は江戸時代始めになされた河川改修によって一本化されたと言われている。それ以前には香川町大野付近から東へと分岐し、石清尾山塊の南側に回り込んで平野中央部に北東に流れるもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は現在は水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林地区から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池（消滅）を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、この流路の名残りは今でも御坊川としてとどめられている。

高松平野を流れる諸河川は南の讃岐山脈から平野部への流入口で穏やかな傾斜を持つ扇状地形の沖積平野を形成し、農耕に適した地味豊かな土壌をもたらしたが、これらの諸河川の中流域は伏流しその表層が涸れ川になることが多かったため、早くからため池を造築することで水不足の解消がなされてきた。これらのため池は年間 1,000mm 前後と降水量の乏しい温暖寡雨な、いわゆる瀬戸内海式気候に属する讃岐平野において農業用水確保のため不可欠なものである。また、林・多肥地区周辺は扇状地末端部にあたることから、ため池に加えて出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。しかし、昭和 50 年の香川用水の通水によって、一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ、農業用水確保の不安が払拭された反面、大池・長池等のため池が三郎池の子池となり、地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに、ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

竹部遺跡が所在する高松市上林町は、昭和 31 年 9 月 30 日に木田郡林村が高松市に合併された際、同市林地区の一部として大字上林から改編された。西側に多肥地区が隣接する。遺跡の東には春日川の支川の古川が流れ、南方には由良山、日山が座す。香川インテリジェントパーク（旧高松空港跡地）や県道中徳三谷線の南西側に位置する。近年これらの整備事業に伴い大規模な発掘調査がなされており、弥生時代・



第2図 竹部遺跡の位置

中世・近世にかけての集落における生活痕が明らかにされている。また往時は、旧河道群が存在しており、これらに伴う後背湿地や自然堤防等、現在に比べ起伏の富んだ地形を形成していたことが明らかである。今回の調査地は狭い範囲であるが、土壌の一部に低地性のシルトと砂層の互層堆積が確認され、当該地が低湿地であった可能性が考えられる。

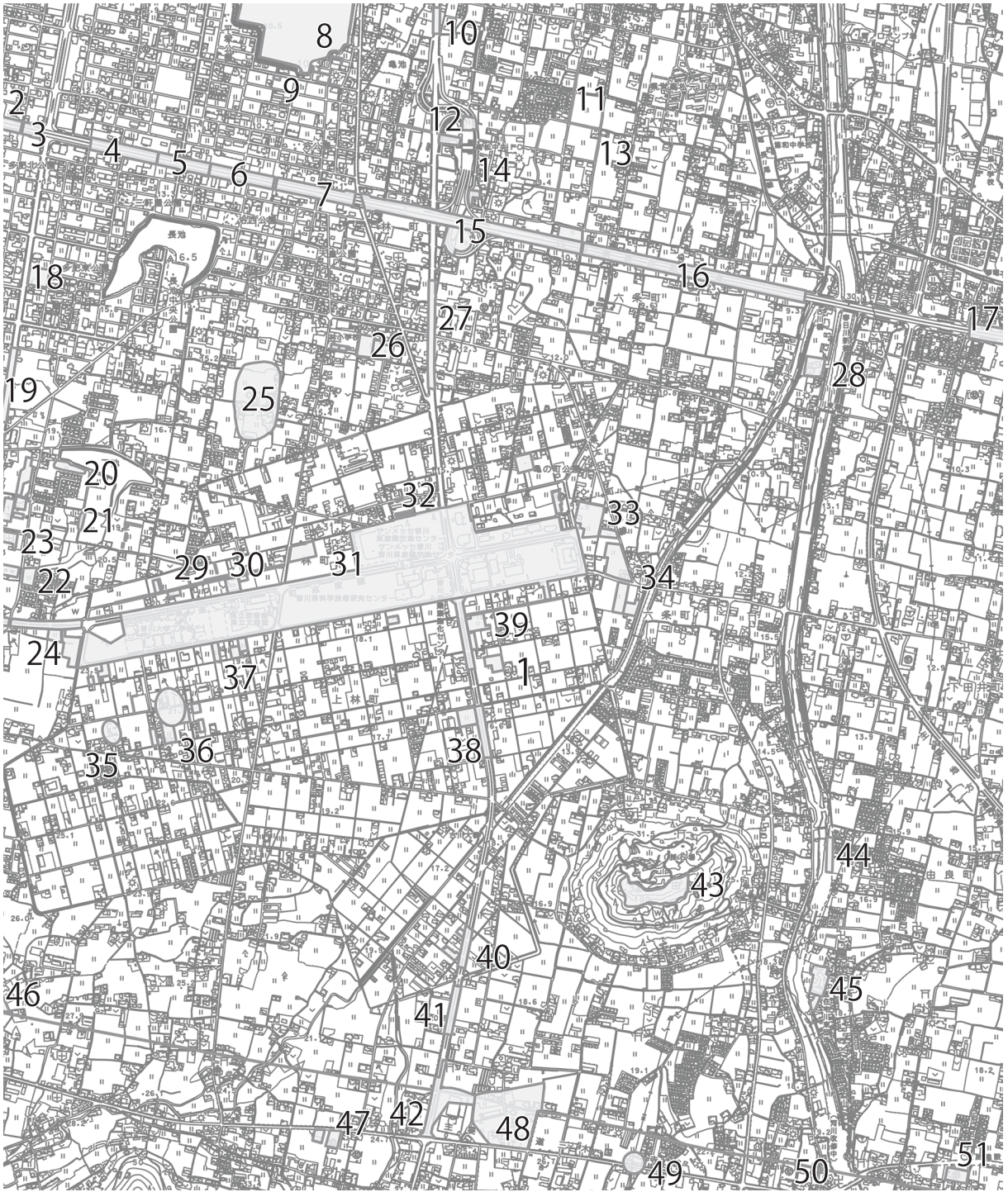
第2節 歴史的環境

竹部遺跡の所在する上林町周辺における最古の遺跡は、旧石器時代後期に属する雨山南遺跡である。瀬戸内技法による翼状剥片など石器製作を示唆する資料が多量に表採されている。この他、久米池南遺跡、諏訪神社遺跡、中間西井坪遺跡、香西南西打遺跡、西打遺跡等で確認されているが、平野中心部においての検出例は乏しい。次の縄文時代では晩期に属する柱穴群が林・坊城遺跡で検出されている。また、三谷三郎池等から石鏃が表採されている。

弥生時代前期には、浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡で水田跡が検出されている。また、北野遺跡では旧河道縁辺と微高地上で前期末の土坑や溝跡、光専寺山遺跡では小丘陵裾より前期末の土器包含層が確認されている。中期には松林遺跡、日暮・松林遺跡などで竪穴住居跡、掘立柱建物跡が確認される。丘陵上に位置する高地性集落と考えられる中山田遺跡は中期末から後期初頭に属し、焼失痕を伴う竪穴建物跡や倉庫跡などと共に、分銅形土製品が確認されている。三谷通り谷遺跡では中期末の土器と後期後半の土器棺墓が7基確認されている。後期には集落として空港跡地遺跡、日暮・松林遺跡、宮西・一角遺跡など、墓としては空港跡地遺跡、林・坊城遺跡、日暮・松林遺跡、凹原遺跡で周溝墓、土器棺墓などが確認されている。弥生時代後期後半から古墳時代前期には、上林遺跡、北野遺跡、鎌野西遺跡、三谷中原遺跡など、近辺の遺跡数が増加する傾向が認められている。

古墳時代に入ると、空港跡地遺跡において前期・中期の竪穴建物、三谷三郎池西岸窯跡の初期須恵器窯が確認される。古墳としては、前期に属する小日山1号墳は日山から派生する丘陵頂部に立地する。全長約31mを測る前方後円墳で、塊石積みの竪穴式石室が露出している。この1号墳の東側丘陵頂部にある小日山2号墳は直径約16mを測る円墳で、同時期に属する可能性がある。中期初頭に属する全長88mの大型前方後円墳の三谷石舟古墳は高松平野南部における盟主墳であり、刳拔式石棺が後円部に露出している。次いで盟主墳と数えられるのが高野丸山古墳である。直径約42mを測る大型円墳で幅10～15mの周濠が備わっている。高野南1号墳はわずかな墳丘部しか残っていないが、中期末の円筒埴輪片が採集されている。平石上1号墳の内部主体は不明だが、後期前半に属する可能性がある。後期後半以降になると、この地域においても横穴式石室を主体部にもつ古墳が多く築造されるようになる。最大規模の横穴式石室をもつのは矢野面古墳で、全長9.1mの両袖式である。他に発掘調査がなされた古墳では、中山田3・4号墳、石舟池古墳群、平石上2・3号墳、万塚古墳が挙げられるが、いずれも石室の基底石付近の残存を確認するにとどまる。雨山南古墳群や周辺に分布する北山古墳群、住蓮寺池古墳群も同じ後期後半～終末期に属する群集墳である。この他、横穴式石室をもつ上佐山東麓古墳、加摩羅神社古墳、池田合子神社御旅所古墳、光専寺山東・西古墳があるが時期・内容ともに詳細な実態はよくわかっていない。

飛鳥時代から奈良時代にはこの地域に古代の官道である南海道が通っており、延喜式に見られる「三谿駅」が設置されていたと考えられている。この南海道の推定ライン上に位置する三谷中原遺跡では平安時代に属する自然河川や条里地割に沿った溝跡が確認されている。高松平野の条里地割は市街地、埋立地や氾濫原を除いた平野部に加え、土地境や用水、里道などに顕著に現在もその痕跡をとどめ、広く分布している。



- 1 竹部遺跡 2 居石遺跡 3 井手東Ⅱ遺跡 4 井手東Ⅰ遺跡 5 浴・長池遺跡Ⅱ 6 浴・長池遺跡Ⅰ
 7 浴・松ノ木遺跡 8 大池遺跡 9 大池南遺跡 10 木太町九区遺跡 11 林下所・六条村遺跡
 12 林・浴遺跡 13 林下所・六条乾遺跡 14 林・下所遺跡 15 林・坊城遺跡 16 六条・上所遺跡
 17 東山崎・水田遺跡 18 多肥下町下所遺跡 19 凹原遺跡 20 池の内遺跡Ⅱ 21 池の内遺跡Ⅰ
 22 多肥松林遺跡 23 日暮・松林遺跡 24 多肥宮尻遺跡 25 天皇西原遺跡 26 林宗高遺跡
 27 宗高坊城遺跡 28 六条城跡 29 宮西・一角遺跡 30 一角遺跡 31 空港跡地遺跡
 32 公務員宿舍遺跡 33 六条下所遺跡 34 六条上青木遺跡 35 畑遺跡 36 拝師廃寺
 37 上林・本村遺跡 38 上林遺跡 39 中林遺跡 40 北野遺跡 41 鎌野西遺跡 42 三谷中原遺跡
 43 由良山城跡 44 大灘遺跡 45 由良南原遺跡 46 彦作遺跡 47 横内東遺跡 48 鎌野城跡
 49 高野丸山古墳 50 旧南海道跡 51 川島郷遺跡

第3図 周辺遺跡の分布図

南海道は高松市域では現在の三木町の白山南麓と中間町の六つ目山北麓を結ぶ直線として設定されており、高松平野における条里地割は平野を東西に貫く南海道とこれに直交する郡界線を縦横の基準とし、敷設されたことが知られている。この他、高野廃寺では転用された礎石や奈良時代から平安時代の軒瓦が出土していることから古代寺院と推定されている。

鎌倉時代から室町時代では上林遺跡で掘立柱建物跡や溝が検出されている。光専寺山遺跡は室町時代に光専寺が建っていたと伝えられており、室町時代頃の遺物が表採されている。また、戦国期の動乱により、この地域においても数多くの城館が造られている。主たるものとしては三谷氏の上佐山城跡(王佐山城跡)・三谷城跡、三谷氏の家臣とされる鎌野・由良両氏の鎌野城跡、由良城跡・由良山城跡などである。しかしながら、土佐の長宗我部氏の讃岐侵攻や羽柴秀吉の四国出兵により諸氏の勢力は衰え、諸城館も次第に廃絶の途につく。

天正16(1588)年、豊臣秀吉の配下にあった生駒親正により高松城が築城され、城下町が整備される。生駒家四代による讃岐一国支配の後、松平頼重が高松城に入った。松平家は11代にわたって藩主をつとめ、明治維新を迎えることとなる。調査地は近世には上林村に属し、竹部・青木・高丸の三部落を合わせて下所免を構成した。

第二次世界大戦末期、上林町・林町界隈に軍用飛行場が造成された。その後一部が旧高松空港として供用される一方で、造成時に施工された地割に沿って再び農地に戻されている。

第3章 調査成果

第1節 基本層序

当地の基本層序は概ねⅠ～Ⅳ層に大別できる。Ⅰ層は耕作土並びにこれに伴う床土(飛行場改編・農地解放以後のもの)で、おおよそ30cmの層厚を測る。Ⅱ層は旧耕作土層(飛行場建設以前のもの)で第1・2・4調査区内に認められる。Ⅲ層は第1調査区の一部、及び第2～4調査区内で認められた黒褐色系の粘土～シルト層である。比較的均質な土層で、遺構形成の基盤層である。少量ではあるが土器細片を含む。Ⅳ層は暗灰黄色系礫混じり砂質層である。地山と判断した。第1調査区内北半においてのみ、Ⅰ層直下でこのⅣ層が認められた。

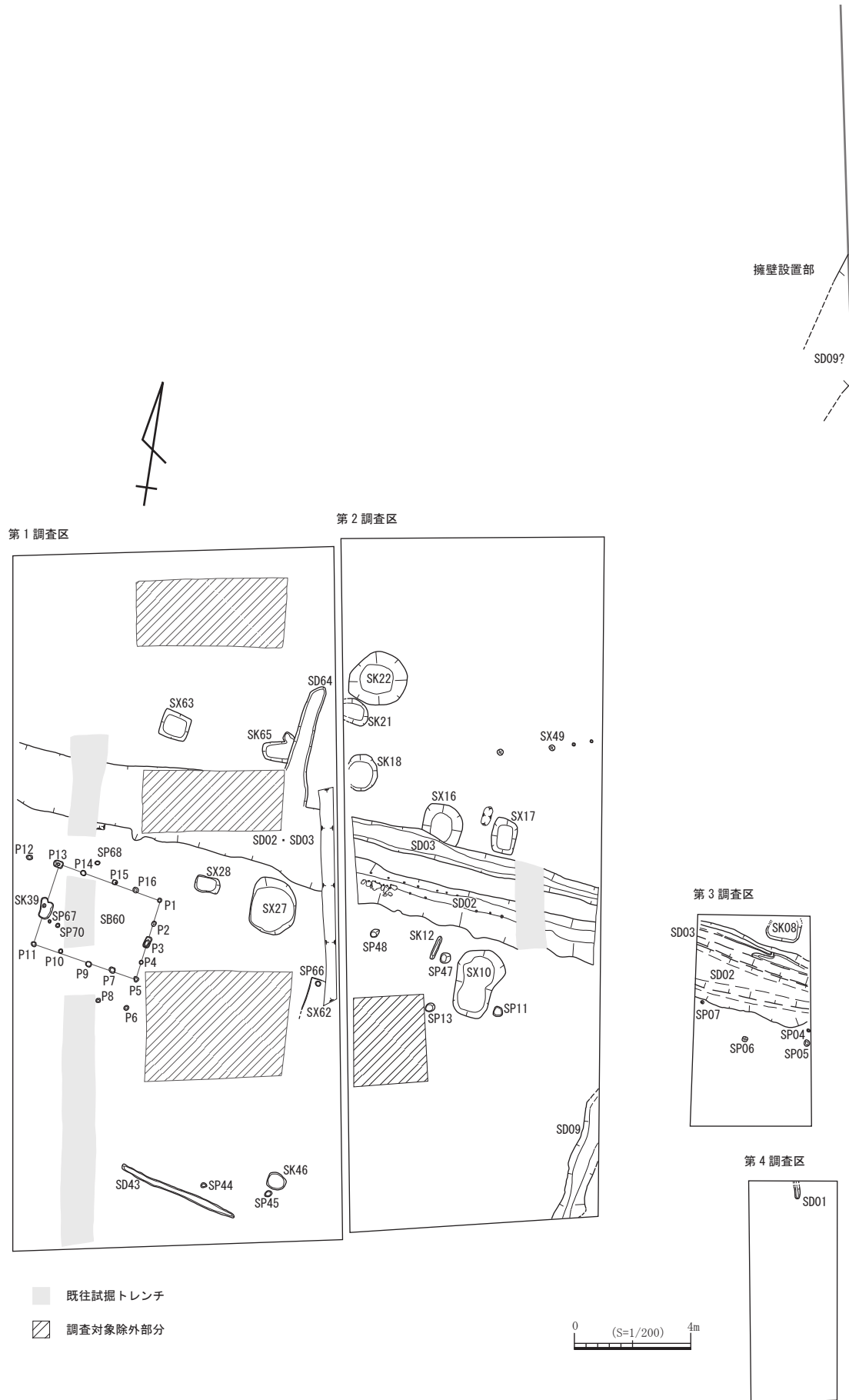
第2節 第1調査区

第1調査区においてはⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層ないしⅣ層が認められる。Ⅲ・Ⅳ層が併存していることはなく、これら基盤層の切り替わり部分が本調査区の北西隅に見られる。

第1調査区は事業地内の北西側に位置しており、建物基礎部の西半にあたる。調査面積は概ね264㎡を測る。工事掘削に際し、遺構面への保護層を確保できる3カ所(約40㎡)は調査対象から除外した。

SK39(第6図) 調査区中央西側で検出した不整形の土坑である。最大長約70cm、深度約10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトに遺構面ブロックを5%含む。遺物は出土していない。

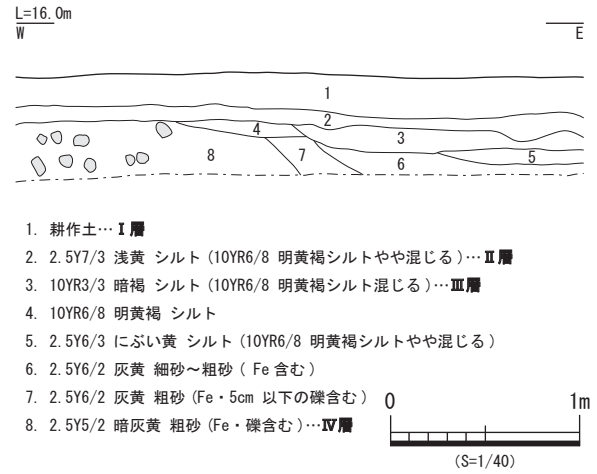
なお、整理作業の段階において、埋土の類似性と検出位置を考慮すると、後掲のSB60の一部にあたる可



能性が高い。

SK46 (第6図) 調査区南西側に位置する歪な円形を呈した土坑である。最大径は約35cm、深さは約12cmを測る。西側寄りに堆積した埋土は3層に分かれる。いずれも暗灰黄色シルトをベースとし、沈着物や含有物に差異が見られた。遺物は出土していない。

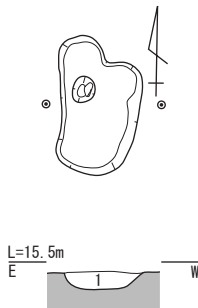
SK65 (第6図) 調査区北側で検出した不整形を呈する土坑である。SD64に切られる。最大径は約100cmを測り、深度は10cmに満たない。埋土は暗灰黄色シルトで鉄分や直径10cm以下の礫を含む。遺物は出土していない。



第5図 第1調査区基本層序

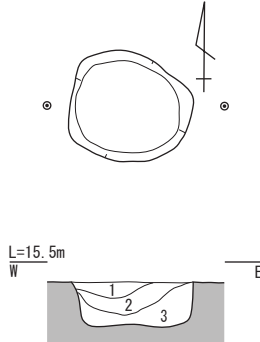
SD02・03 第1～3調査区を横断する大規模な溝跡である。調査開始時は、中世に帰属すると想定していたため掘削を行ったが、先行して実施した第2・第3調査区における掘削の際、最下層から近世の遺物が出土したため、少なくとも埋没の開始が近世まで降ることが判明した。このため、第1調査区においては埋土の掘削を行わず、試掘トレンチの断面を利用した断面形状の記録に留めることとした。溝の詳細については次節で報告する。

SK39



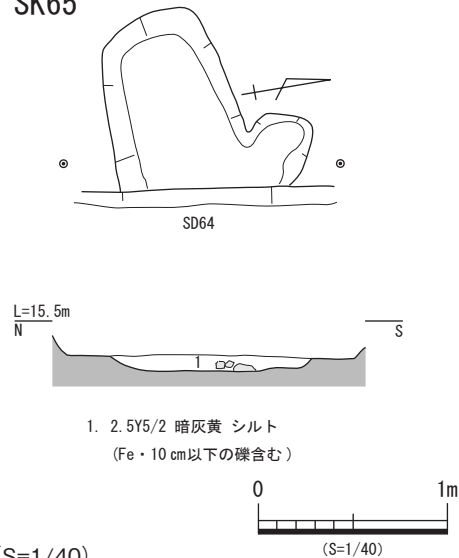
1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト
(遺構面ブロック5%含む)

SK46



1. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト (Fe沈着)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
(遺構面ブロック10%含む)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト

SK65

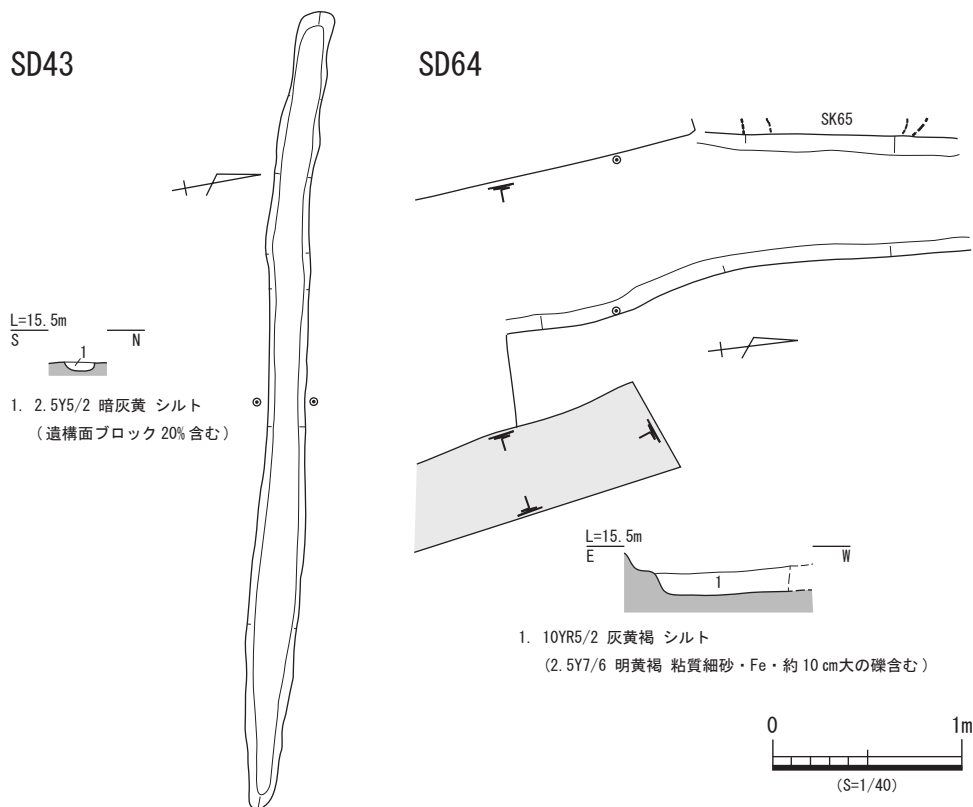


1. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
(Fe・10cm以下の礫含む)

第6図 第1調査区SK平・断面図 (S=1/40)

SD43 (第7図) 調査区南側で検出した溝状遺構である。主軸方向は先述のSD02・SD03にほぼ平行する。幅約20cm、深さ約5cmを測る。鋤溝であろうか。埋土は暗灰黄色シルトで遺構面ブロックを20%含む。遺物は出土していない。

SD64 (第7図) 調査区北東隅近辺で検出した溝状遺構である。ほぼ直線的に延びる。SD02・SD03に切られる。SD03の北端にほぼ直交する。最大幅約70cm、深度は10cm程度を測る。埋土は灰黄褐色シルトに明黄褐色粘質細砂が混じり、鉄分と10cm程度の礫が含まれる。遺物は出土していない。



第 7 図 第 1 調査区 SD 平・断面図 (S=1/40)

SP66 (第 8 図) 調査区中央東寄りで検出した柱穴である。SX62 下位で検出した。最大径約 18cm のほぼ円形を呈する。断面形状はほぼ筒形を呈し、深度は約 10cm を測る。黒褐色粘質細砂ににぶい黄橙色シルトが混じった埋土である。遺物は出土していない。

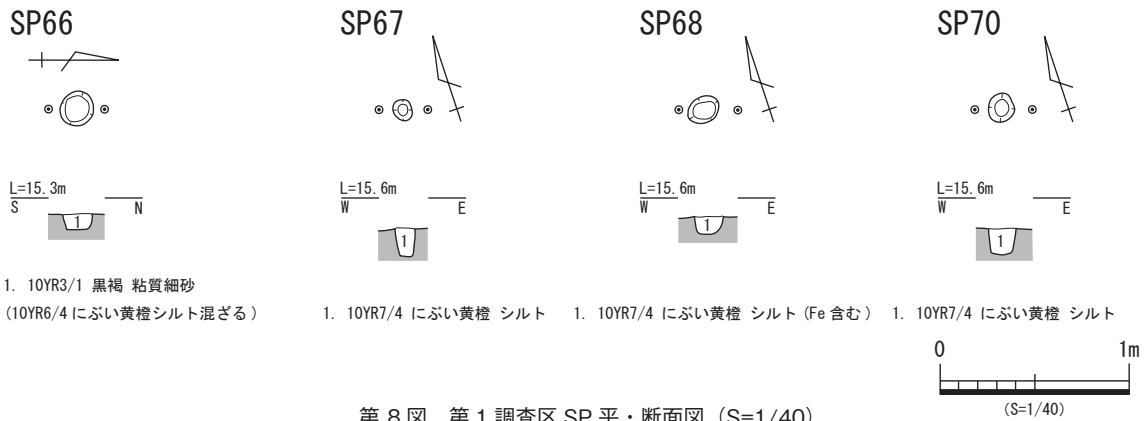
SP67 (第 8 図) 最大径約 12cm の円形を呈する。断面は逆台形に近いほぼ筒形で、深度は約 15cm を測る。埋土はにぶい黄橙色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SP68 (第 8 図) 調査区中央西寄りで検出した。後掲の SB60 の北側に位置する。楕円形を呈し、最大径は約 20cm に及ぶ。断面形状は U 字型で深度は約 10cm を測る。埋土は鉄分を含むにぶい黄橙色シルトの単層である。遺物は出土していない。なお、SB60 の一部の柱穴の埋土と類似性が認められるが、位置関係から同一遺構の可能性は低いと思われる。

SP70 (第 8 図) 最大径約 14cm の円形を呈する。断面は筒形で、深度は約 14cm を測る。埋土はにぶい黄橙色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SB60 (第 9 図・写真 1) 調査区中央の西側で検出した掘立柱建物跡である。桁行約 400cm × 梁間約 300cm の面積を測る。残存状況から判断して 2 ~ 4 × 4 間の中心軸を伴わない側柱構造物である。各柱穴は直径約 20 ~ 35cm、深度は約 10 ~ 30cm を測る。これら柱穴の形状と配列から察するに上部構造物は軽量のものとして推測され、掘立柱建物とはいえ、比較的小さな小屋のようなものと考えられる。

埋土については灰黄褐色のシルト、並びににぶい黄橙色シルトを主とし、各々含有物に差異が見られる



第 8 図 第 1 調査区 SP 平・断面図 (S=1/40)

ものの、概ね共通する土質が認められる。

また、調査時に P06・P08・P12 は埋土の類似性を考慮し、SB60 に附随するものとして遺構番号が付与された。SB60 の一部や付属の施設等の可能性が考えられる。

出土遺物については僅少であるが P03 より陶器 (1・2) (第 11 図) が出土している。1 は京・信楽系陶器碗の口縁部片である。灰白色の胎土に透明釉を施し、釉上にさらに暗赤色の絵付けが上塗りされている。細片のため、絵付けの濃淡が均等で、施術方向は不明である。2 は京・信楽系陶器蓋である。最大径は 5.4cm と算出できる。施釉は頂部からこの径の下半まで施術されているものの、下位は露胎している。恐らく凹形状の受け口をもつ身と対になると推察される。遺物は僅少だが、高松城様相編年の様相 5 以降の年代が考えられる。(佐藤・松本 2001・松本 2003)。

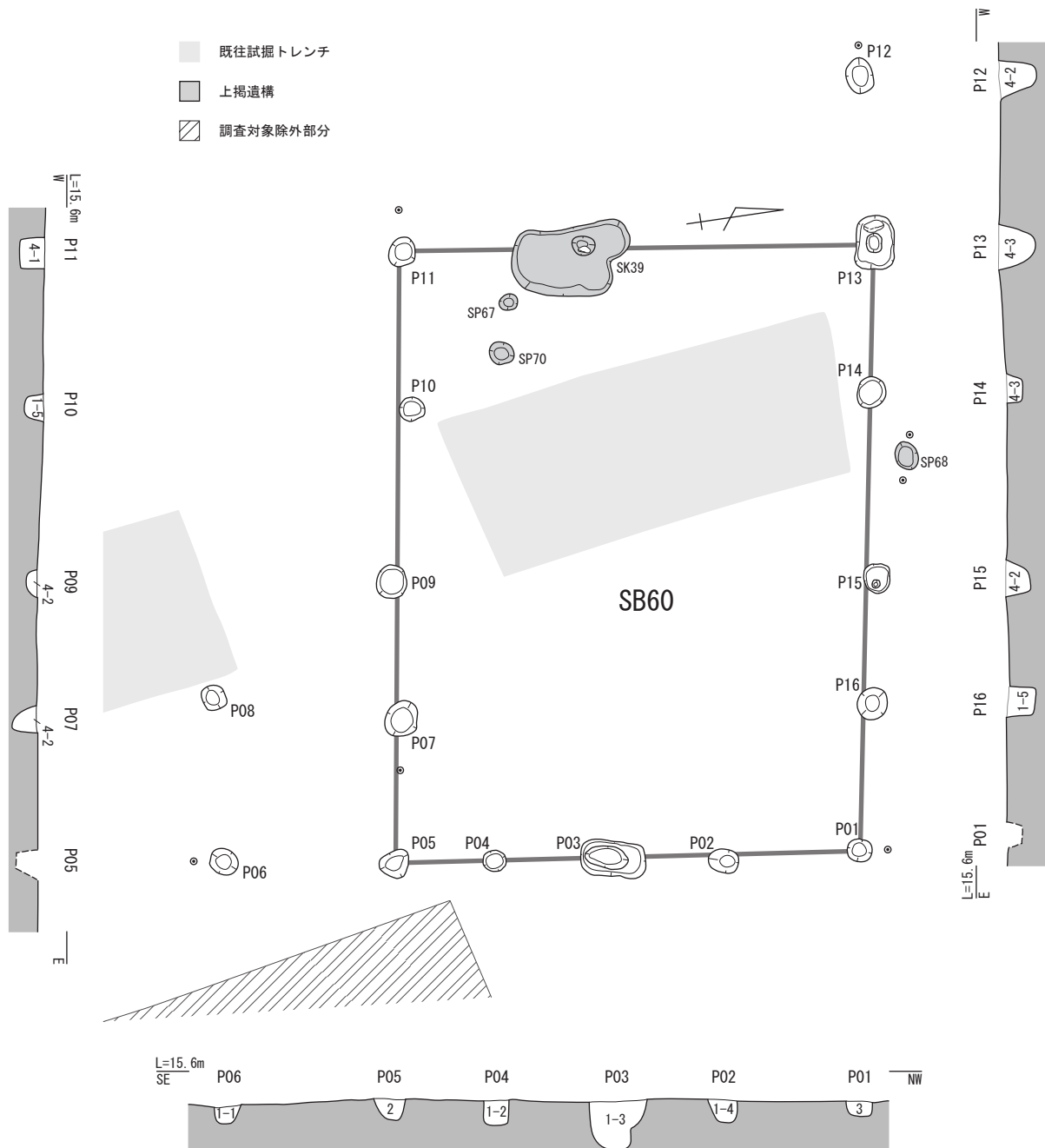
SX27 (第 10 図) 調査区中央に位置する。平面楕円形を呈する。最大径は約 200cm、深度は約 110cm を測り、6 層の層序が認められる。埋土はいずれもシルト質だが、含有物に差異が見られる。第 1 層を除く第 2 層以下に礫が含まれる。

出土遺物は 3～6 (第 11 図) である。3 は弥生土器甕の底部片である。内外面ともに磨滅しているため、調整は不明瞭である。胎土は普通、焼成は良である。4 は土師質土器の蓋である。端部は残存しておらず、法量は不明である。天井部に取り付けられたつまみの貼りつけが丁寧に施されている。5 は土師質土器の蓋片である。推定径は 21.8cm を測る。天井部外面は不定方向のナデが見られる。鏝部から天井部への立ち上がり部分は指頭圧による調整が著しい。胎土は若干粗く、焼成は良である。6 は土師質土器の底部片である。残存状況から底径は約 23.9cm と推定される。中央底部に陽刻による刻印が見られる。「ㄗ」と「エ」を組み合わせた形状である。4～6 は一連の土師質貯蔵具一部であると考えられ、本遺構が何らかの貯蔵機能を有していた可能性が考えられる。

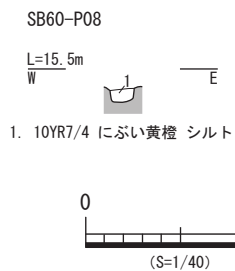


写真 1 SB60 完掘状況 (東から)

SX28 (第 10 図) 調査区中央に位置する。平面形状はほぼ方形を呈し、最大径は約 80cm、深度は約 20cm を測る。埋土は暗灰黄色シルトの単層で地山ブロックを 5%、遺構面ブロックを 30% 含む。



- 1-1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト
- 1-2. 10YR4/2 灰黄褐 シルト (粘土混じり)
- 1-3. 10YR4/2 灰黄褐 シルト (地山ブロック・遺構面ブロック 20% 含む)
- 1-4. 10YR4/2 灰黄褐 シルト (遺構面ブロック 10% 含む)
- 1-5. 10YR4/2 灰黄褐 シルト (10YR7/4 にぶい黄橙 シルト混ざる)
- 2. 10YR3/1 黒褐 粘土
- 3. 10YR4/1 褐灰 シルト
- 4-1. 10YR7/4 にぶい黄橙 シルト (10YR4/2 灰黄褐 シルト混ざる)
- 4-2. 10YR7/4 にぶい黄橙 シルト (Fe 含む)
- 4-3. 10YR7/4 にぶい黄橙・10YR4/2 灰黄褐 シルト (Fe 含む)



第9図 第1調査区SB平・断面図 (S=1/40)

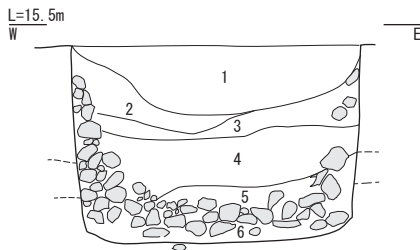
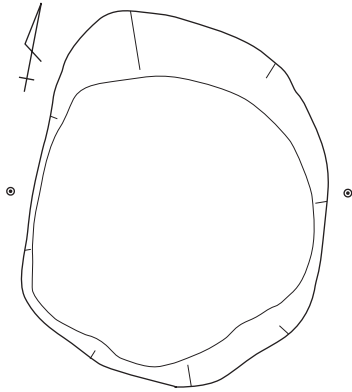
埋土中から7 (第11図) を検出した。7は肥前系磁器の底部片である。内外面ともに透明釉がかかるが、高台の畳付けのみ露胎である。様相3以降である。

SX62 (第10図) 調査区東側で平面方形で検出しており、最大長約120cm、深度約3cmを測る。埋土に

については灰黄褐色シルトで遺構面ブロックを3%含む。記録写真より、下端は南側より北側へと傾斜したものと推測される。下位でSP66を検出している。遺物は出土していない。

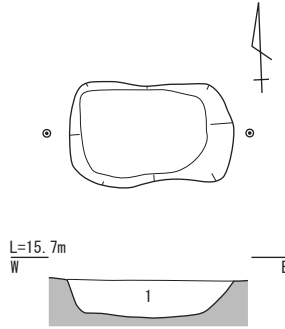
SX63 (第10図) 調査区北側で検出した。平面方形を呈する。最大長は約100cm、深度は約25cmを測る。

SX27



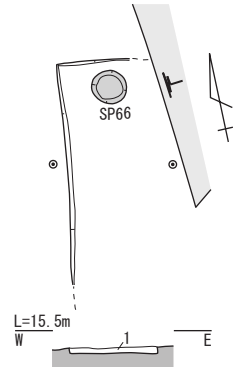
1. 2.5Y7/2 灰黄 シルト
2. 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト (地山ブロック5%含む)
3. 2.5Y7/1 灰白 シルト (遺構面ブロック20%含む)
4. 2.5Y7/1 灰白 シルト (Fe含む)
5. 2.5Y6/1 黄灰 シルト
6. 礫層

SX28



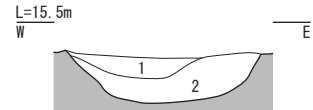
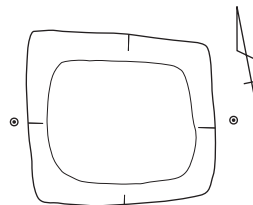
1. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
(地山ブロック5%・遺構面ブロック30%含む)

SX62

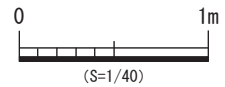


1. 10YR4/2 灰黄褐 シルト
(遺構面ブロック3%含む)

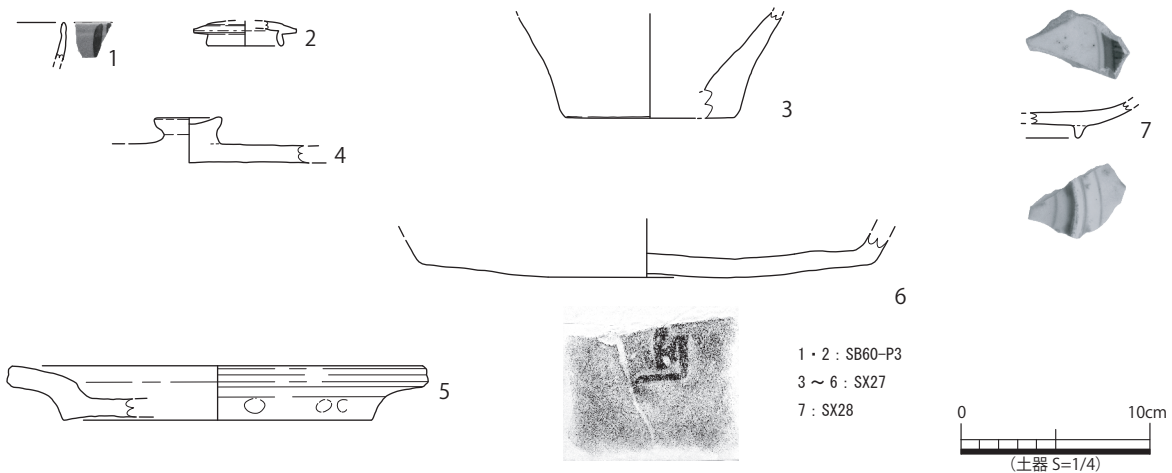
SX63



1. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
(地山・遺構面ブロック10%含む)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
(地山・遺構面ブロック20%含む)



第10図 第1調査区 SX 平・断面図 (S=1/40)



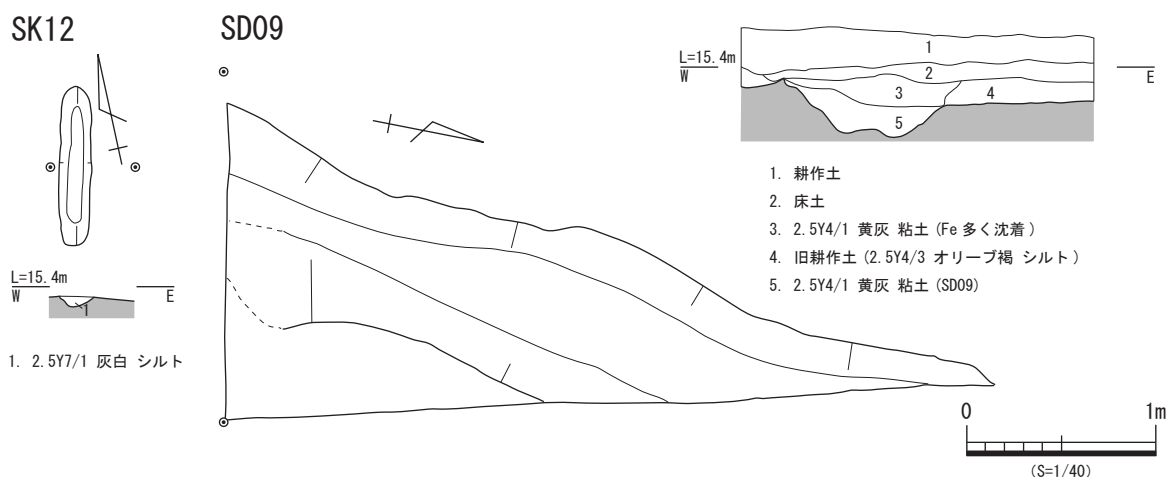
第11図 第1調査区 出土遺物 (S=1/4)

埋土は暗灰黄色シルトに地山ブロックと遺構面ブロックを含む。これらの含有量に差異が認められるため、層序は上下に分けられる。遺物は出土していない。

第3節 第2調査区

第2調査区は建物基礎東側にあたる。調査面積は概ね216㎡を測る。基礎工事の掘削が遺構面に及ばない範囲(約15㎡)は調査対象から除外し、現状を維持した。

層序についてはI層・II層・III層が認められる。検出した遺構は、柵列? 1条・柱穴4基・溝状遺構3条・土坑3基・性格不明遺構7基である。

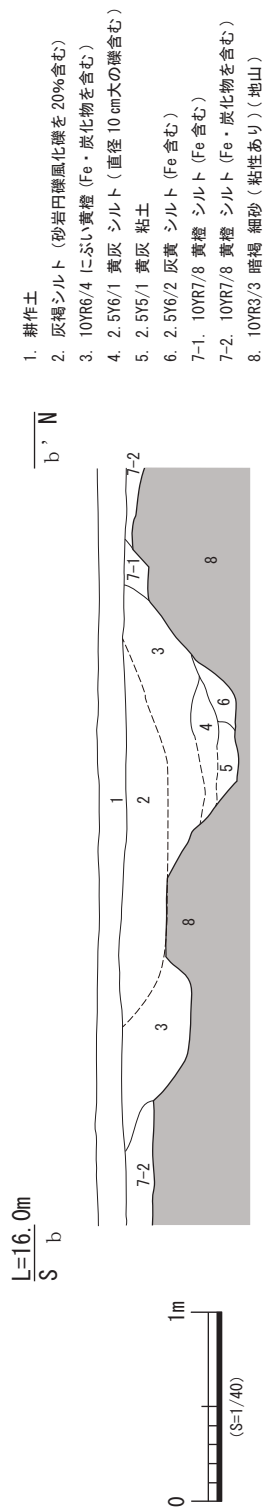
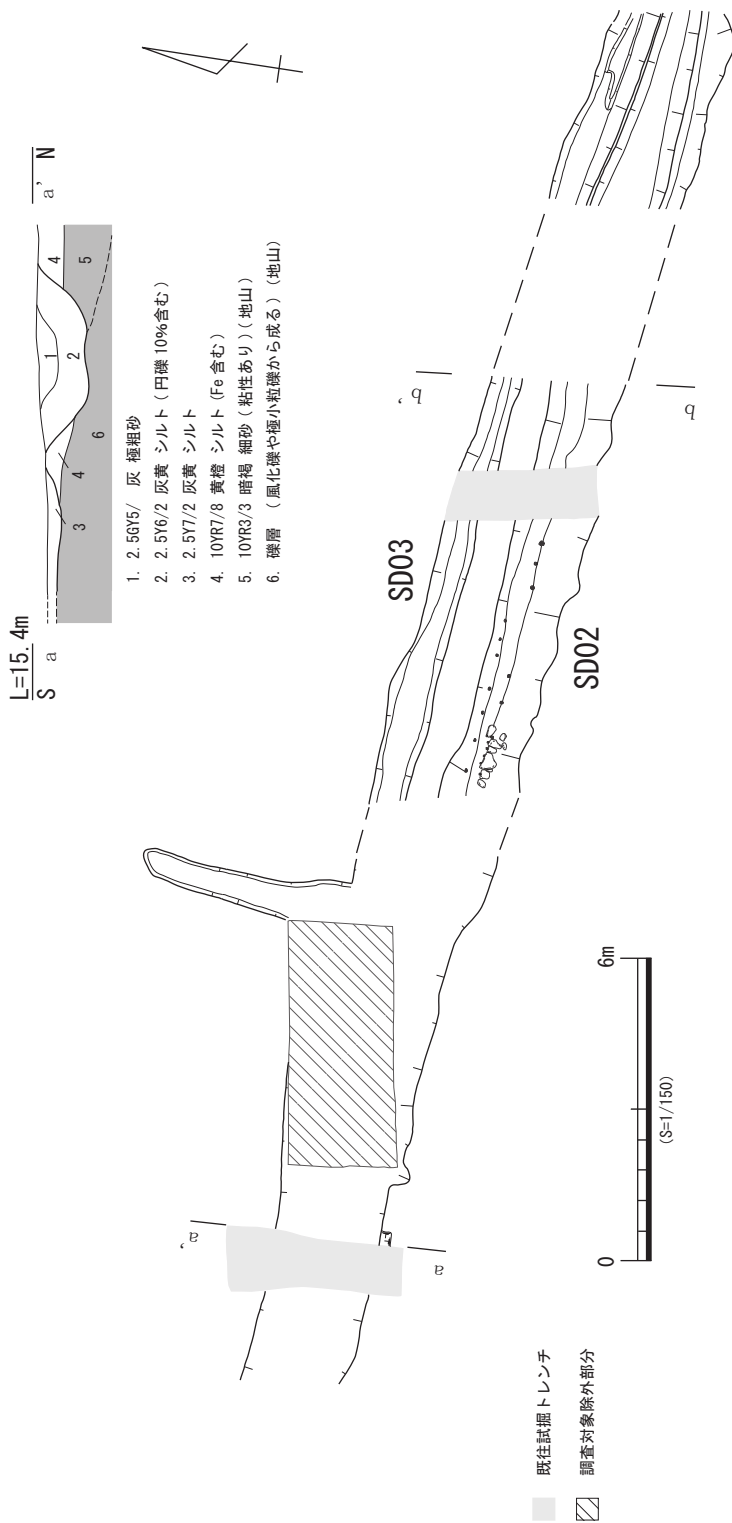


第12図 第2調査区SK・SD09平・断面図 (S=1/40)

SK12 (第12図) 調査区中央で検出した土坑である。最大長約85cmを測り、深度は6cm程度である。埋土は灰白シルトの単層である。遺物は出土していない。

SD02 (第13図・写真2) 隣接する第1調査区より南東方向にさらに延伸し、本調査区内を横断し第3調査区まで延びる。SD03とは約80cm前後の距離を保って並走する。SD02がある程度埋没した後にSD03の埋没が開始している。下端両側に沿って直径10cm以下の木杭が配される。とりわけ南西部においてはこれらの木杭を補強したと思われる人頭大の礫が並んでおり、護岸の役割を担っていたと考えられる。埋土はにぶい黄橙色シルト層の下位に直径10cm大の礫を含んだ黄灰色シルト・黄灰色粘土・灰黄色シルトが確認される。

検出した遺物は8～20(第17図)である。8は陶器の端反碗である。浅黄色の細かな胎土に透明釉が施された京・信楽系陶器である。畳付けのみ露胎。内外の釉厚に差があり、双方の色味に濃淡が観察できる。とりわけ、高台わきから高台ぎわにかけてと、高台内において釉調がとりわけ濃く見られる。恐らく施釉後、焼成までの間にこれらが下位になる状態で長時間据え置かれていた状況が垣間見られる。染付はオリブ黒色である。9は陶器碗である。灰白色の胎土にオリブ黄色の釉を重ねた瀬戸美濃系陶器である。高台はヘラ削りで成形され、露胎である。よってI期の瀬戸美濃系陶器には該当せず、より後代のものである。底部に墨書が認められる。10は肥前系磁器碗の口縁部である。腰部付近で器壁の厚みが際立つ。腰部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部付近で若干外反する。明濃青色の染付が内外面に見られる。11は肥前系



第 13 図 SD02・03 平・断面図 (S=1/150・1/40)

磁器碗の底部である。腰部から下位にかけて肥厚する。高台については、この壘付自体の径が腰部に対し小ぶりである。成形としては高台内を深く削み、重量感のあるつくりになっている。見込みに圏線と中央は花卉か。外面は二重格子文。12は土師質土器の足釜である。口縁部と鏝部の分化が不明瞭である。胎土は粗、内面はマメツ気味である。13は土師質土器の足釜、口縁部である。胎土は粗、内面はマメツしている。14は肥前系陶器皿の底部である。灰白色の胎土にオリーブ色の釉が施されている。削り出し高台で、砂目が付着している。15は土師質土器の井側の口縁部である。成形後に把手を貼りつけており、接合の際の指頭圧痕が周囲に見られる。把手の下位、並びに口縁部付近、内面の所々に暗褐色を帯びた付着物が見られる。使用痕の可能性はある。16は陶器鉢の口縁部である。にぶい橙色の胎土に暗赤褐色で釉を施しており、肥前系と思われる。文様は素地に陰刻し、白土を埋め込む象嵌手法が認められ、三島手と思われる。表面に細かな凹凸が見られないことから、象嵌の拭き上げ後、器全体に施釉したとみられる。17は堺・明石系陶器の播鉢である。口縁外面には凹線、内面には播り目が施されており、端部がナデ消される。18は堺・明石系陶器の播鉢である。明赤褐色の胎土に強い回転ナデで成形され、内面には播り目が刻まる。端部がナデ消される。自然釉がかかる。19は土師質土器の焙烙である。口縁部にあたり、器高は3.1cmを測る。径は34.8cmと想定される。鏝部の屈折がはっきりしている。内外面に指頭圧痕と緻密なナデ痕が観察できる。胎土は際立って精良で、焼成は良好である。鏝部以下、煤化している。20は須恵器碗の口縁部である。体部は緩やかに成形され、口縁端部のみ著しく外湾している。調整ナデの単位が細かい。調査時の所見として最下層から磁器片がみられたこと、中世以前の遺物が全てローリングを受け、混入の可能性が高いことをあわせると、埋没開始は様相3以降と考えられる。層位ごとの遺物のとりあげができていないが、最終埋没は様相8まで降る。

SD03 (第13図・写真2) SD02の北側に併走する溝状遺構である。埋土は約30cm厚のにぶい黄橙色シルト層である。断面からSD02が一定程度埋没した後に開削されたと考えられる。

遺物は21・22(第17図)である。21は土師質土器足釜の脚部片である。明赤褐色を帯びる。22は陶器の碗である。浅黄橙色の素地に化粧土を重ね、さらに透明釉を施した瀬戸美濃系陶器である。口縁端部を除いて腰部から底部にかけて器壁が肥厚し、釉厚も増す傾向が観察できる。腰部から口縁部にかけてほぼ垂直気味に屈曲する。遺物はSD02よりも古い様相を呈すが、SD02の埋没が一定程度完了した後に埋没が開始していることから、SD02に後出することが明らかである。



写真2 SD02・SD03完掘状況(西から)



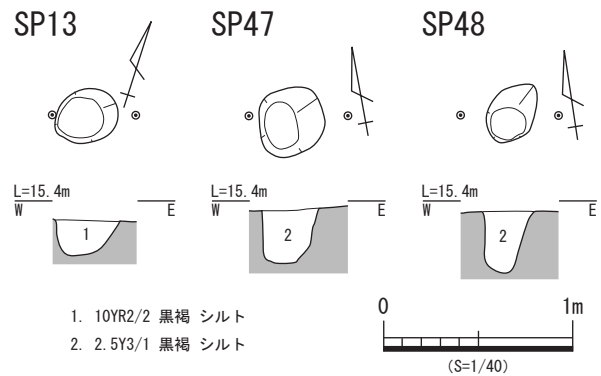
写真3 SD09完掘状況(南西から)

SD09 (第12図・写真3) 調査区南東隅で検出した溝状遺構である。調査区外へと広がるのが予想される。幅約100cm、深さ約20～30cmを測る。層序を確認した箇所では後代の耕作関連土により、遺構の東端が削平されていることが窺える。埋土は黄灰色粘土層である。遺物は出土していない。

SP11 調査区中央部で検出した円形を呈する柱穴である。最大径約 34cm を測る。遺物は出土していない。

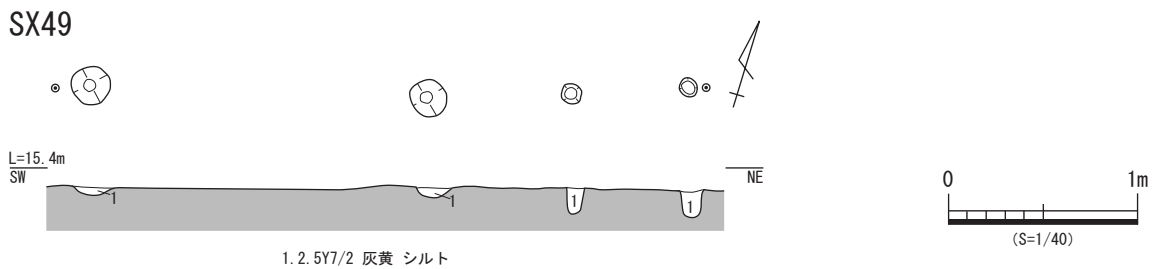
SP13 (第 14 図) 調査区中央部で検出したほぼ円形を呈す柱穴である。最大径は約 32cm、深度は約 20cm を測る。断面形状は歪なレンズ状である。埋土は黒褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SP47 (第 14 図) 調査区中央で検出した柱穴である。円形を呈し、最大径は約 34cm、深度は約 30cm を測る。埋土は黒褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。



第 14 図 第 2 調査区 SP 平・断面図 (S=1/40)

SP48 (第 14 図) 調査区西側で検出した卵形を呈する柱穴である。最大径は約 34cm、深度は約 32cm を測る。埋土は黒褐色シルトの単層である。遺物は出土していない



第 15 図 第 2 調査区 SX49 平・断面図 (S=1/40)

SX49 (第 15 図) 調査区北西側で 4 基の柱穴を検出した。概ね直線状に並ぶが間隔は不均等で遺構の機能は不明である。あるいは柵列の可能性も考えられる。埋土はいずれも灰黄色シルトの単層である。西から P1～4 とし、P1・P2 は直径 20cm 程度、P3・P4 は直径 10cm 程度と寸法にばらつきがみられる。いずれも遺物は出土していない。

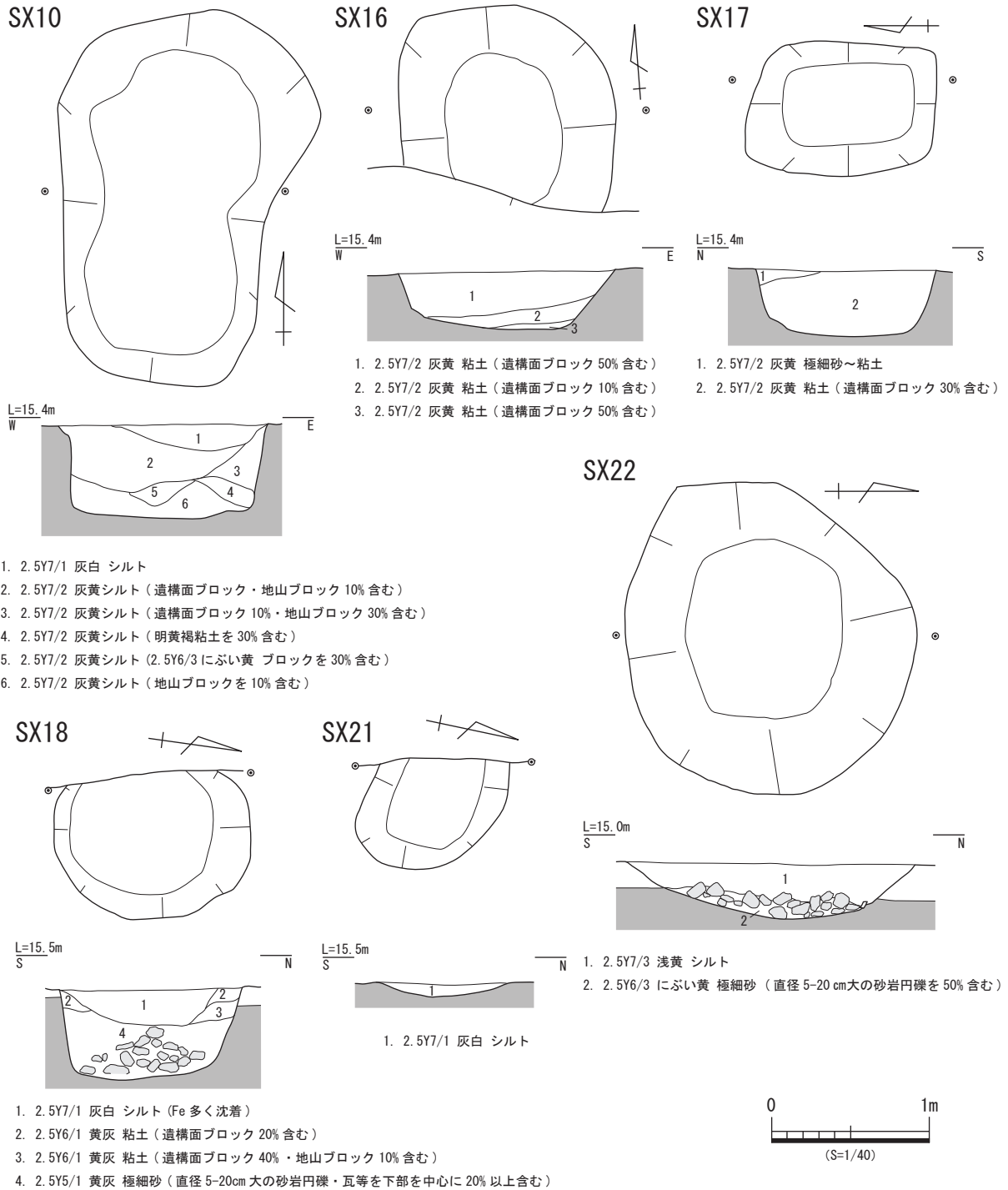
SX10 (第 16 図) 調査区中央で検出した隅丸方形の性格不明遺構である。最大長約 240cm、深度は約 60cm を測る。埋土は灰黄色シルトを中心に含有物で 6 層に分かれる。遺物は出土していない。

SX16 (第 16 図) 調査区中央北よりに位置する性格不明遺構である。東西に調査区を横断する SD03 に切られる。形状は残存状況から隅丸方形と想定され、最大長約 140cm、深度は約 40cm を測る。遺構面ブロックを含んだ灰黄色粘土層が相互に堆積する。遺物は出土していない。

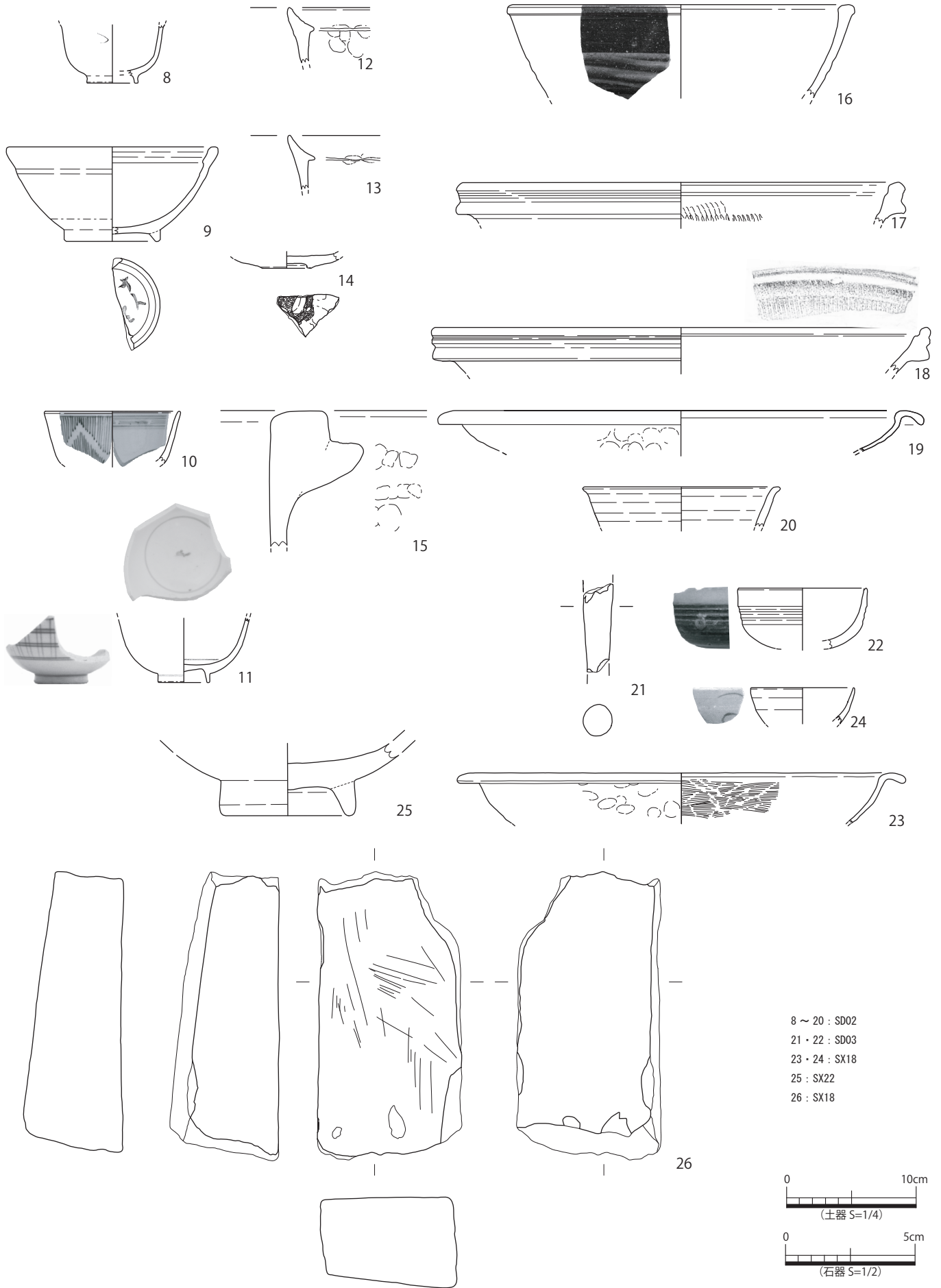
SX17 (第16図) 調査区中央部の東側で検出した性格不明遺構である。SX16の南東方向にあたる。1・2層共に削平による攪乱の可能性が想定される。遺物は出土していない。

SX18 (第16図) 調査区西側で検出した性格不明遺構である。埋土は4層に分かれる。

出土遺物は23・24・26(第17図)である。23は土師質土器の焙烙である。内面にハケ目、外面に指頭圧痕の調整痕が観察できる。鏝部の屈折は比較的是っきりしている。鏝部上面から側面部部にかけての煤



第16図 第2調査区 SX 平・断面図 (S=1/40)



第17図 第2調査区 出土遺物 (S=1/4・1/2)

化が著しい。内外面に付着物が見られる。24は瀬戸・美濃系磁器碗である。口径は概ね8cmと推定され、小碗であろう。灰白色の胎土に透明釉が施されており、とりわけ体部においては素地の調整痕が顕著に観察できる。また、胎土内にやや粗い含有物が目立つ。腰部内面に溶着痕がある。26は安山岩製と思われる砥石である。一部に剥離・割れ等が見られるものの、砥面の使用痕が明瞭である。

SX21 (第16図) 調査区西側で検出した性格不明遺構である。最大長は約70cm、深度は約10cmを測る。埋土は灰白色シルトの単層である。遺物は出土していない。

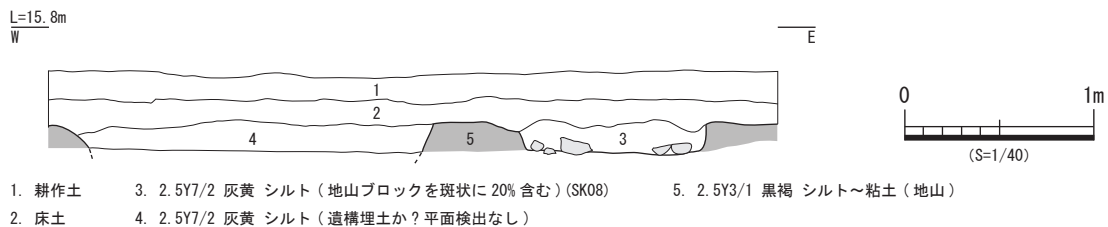
SX22 (第16図) 調査区西側で検出した性格不明遺構である。埋土は2層に分かれ、上層は浅黄色シルト、下層はにぶい黄色極細砂に直径5～20cm大の砂岩円礫を50%含む。

25は肥前系陶器の呉器手碗(第17図)と考えられる。淡黄色の素地に透明釉が施され、腰部下位から底部に向かって器壁が比較的肥厚する。高台内側は高台接合部を補強するために念入りに調整が加えられている。畳付は露胎だが、一部に砂目の溶着痕が観察できる。

第4節 第3調査区

第3調査区は当該地南東側に位置し、合併処理浄化槽設置部分にあたる。おおよそ30㎡である。

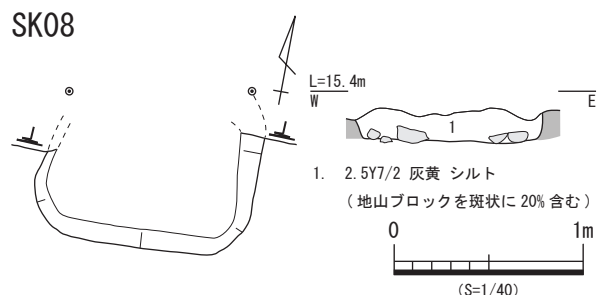
基本層序については、耕作関連土で形成されるI層と黒褐色系の粘土～シルトで形成されたIII層を主体とした層序である。検出した遺構は前掲した溝2条に土坑1基、柱穴4基である。



第18図 第3調査区基本層序

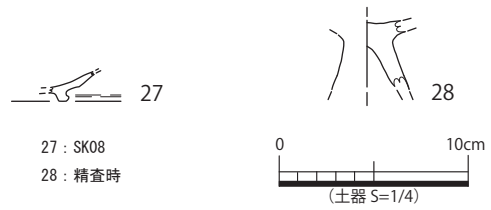
SK08 (第19図) 調査区北壁に接して検出した土坑である。最大長約110cm、深さ約20cmを測る。埋土は遺構面ブロックを斑状に含む灰黄色シルトの単層である。埋土には握り拳大から人頭大の礫が大量に含まれていたが、これらが人為的なものかは不明である。

出土遺物は27(第20図)の土師質土器の碗である。底部のみが残存する。胎土はやや粗く、焼成もやや不良である。内面は橙色を呈するものの、外面は被熱し、明黄褐色を呈する。内面は一様に磨滅しているが、全体的に付着痕が見られる。



第19図 第3調査区SK平・断面図 (S=1/40)

SP04～SP07 いずれもSD02の南側で検出した柱穴である。埋土は10YR8/3浅黄橙色シルトと共通したものである。深度は約2～7cmを測る。遺物はいずれも出土していない。



第20図 第3調査区出土遺物 (S=1/4)

その他 その他、精査時に須恵器の高杯(28)(第20図)が出土している。頸部のみが残存しており、径は2.6cmを測る。焼成不良である。

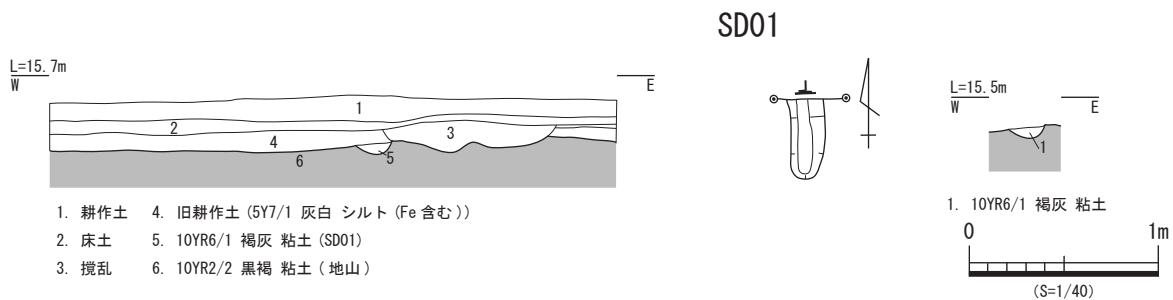
第5節 第4調査区

第4調査区は駐輪場区画にあり、約23㎡である。本調査区の基本層序は概ねI層として大別した耕作土、それに伴う床土、II層とした旧耕作土、III層の黒褐色系の粘土～シルトで形成された自然堆積層(地山)である。本調査区では、溝状遺構を1基検出した。



写真4 SD02・SD03完掘状況(東から)

SD01(第21図) 調査区北壁で検出した溝状遺構である。幅約20cm、深さ約10cmを測る。南北方向に広がり、北側は調査区外へ延伸すると思われる。埋土は褐灰色粘土の単層である。遺物は出土していない。



第21図 第4調査区基本層序・SD平・断面図 (S=1/40)

第6節 擁壁設置部

擁壁設置の基礎工事については、包蔵地内外を含め、工事立会に対応した。黄灰色粘土層の埋土、並びに延伸方向が第2調査区南東隅に位置するSD09に類似する溝状遺構(SD09?)を検出した。但し、両者は離れた位置にあるため、同一遺構かは断言できない。遺物は出土していない。

第4章 まとめ

弥生時代～古墳時代

第3調査区で検出したSD09は今回の調査で検出した他遺構同様に調査区南側に見られる黒褐色系粘土～シルト層の地山で検出しているものの、遺構埋土に類似性が見られず、黒みがかった黄灰色粘土層である。検出範囲が限られ、遺物が伴っていないものの、周辺の調査事例と比較すると弥生時代から古墳時代にかけての遺構と埋土等に共通性が見られ、当該期に属する可能性が想定される。隣接する上林遺跡では弥生時代後期後半の自然河川と河川に接続する溝跡が検出されている。

近世

第1～3調査区にかけて広がる大型の溝SD02・SD03は、概ねN-9～10°-E方向に延伸しており、条里地割に沿った溝と考えられる。2条の溝が並走する形で検出しているが、埋没時期に前後が見られることから、同一地点で繰り返し溝の開削がなされたと理解できる。調査地内の遺構密度が疎であることから、周辺への配水を目的とし、土地の区画機能も兼ねた大型水路としての役割を担った可能性が想定される。取水源については恐らく調査地の東側を貫流する春日川の支流である古川であろう。また、掘立柱建物SB60についても同一の地割を指向しており、一体的な景観を形成していたものと考えられる。

第2章第1節で触れたように高松平野では後背湿地や自然堤防等として機能していた低地が次第に平地化し、段階的に条里地割が施工されたと考えられる。南海道を基軸に設定された条里地割は、現代においても継続して高松平野の主要な土地区画の基準線であるが、調査地ではこうした地割の施工が近世まで遅れた可能性がある。遺構密度が疎で、中世以前の遺構・遺物が極めて少量である点からも、当地の本格的な土地利用がなされたのは近世まで降る可能性が高い。

調査地は林飛行場の建設に伴い大規模に地割が改変されたエリアにあたる。戦後もこの際に改変された地割が踏襲され、それ以前の地割の痕跡は表面的には留めていないが、遺構として先行する条里地割が当地にも残存していることが明らかとなった。

参考文献

- 大橋康二 1989『考古学ライブラリー 55 肥前陶磁』
- 佐藤竜馬・松本和彦 2001「高松城出土土器・陶磁器の変遷 様相の把握」『第3回四国徳島城下町研究会 四国と周辺の土器－焙烙の生産と流通－ 佐藤発表追加資料』
- 松本和彦 2003「西の丸町地区出土の陶磁器について」『高松城跡(西の丸町地区)Ⅲ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 香川県教育委員会 2000『埋蔵文化財試掘調査報告 13 香川県内遺跡発掘調査』
- 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2000「上林遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報』平成11年度
- 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2001「上林遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報』平成12年度
- 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2002「上林遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報』平成13年度
- 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社 2000『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 空港跡地遺跡Ⅱ』
- 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊 上天神遺跡』
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念』
- 高松市教育委員会 1992『讃岐国弘福寺領の調査』
- 高松市教育委員会 2000『衣料品販売店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 多肥宮尻遺跡(衣料品販売店舗)』
- 高松市教育委員会 2007『日暮・松林遺跡』共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 高松市教育委員会 2011『診療所・調剤薬局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 中林遺跡』
- 高松市教育委員会 2016『空港跡地遺跡(亀の町地区Ⅰ)-第2次調査- 林コミュニティセンター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 高松市役所内 林村史編集委員会 1958『林村史』
- 高松市歴史民俗協会 1987『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査概報』
- 高松百年史編集室 1988『高松百年史』上下巻

遺物観察表

報文 番号	調査区	出土遺構	種類	器種	部位	法量			調整		色調		胎土	焼成	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	外面/釉調	内面/胎土			
1	1	SB60-P03	陶器	碗	口縁部	-	-	[2.0]	施釉、絵付け	施釉	透明	7.5Y8/2灰白	細		京・信楽系 文様: 7.5R3/4 暗赤
2	1	SB60-P03	陶器	蓋		(3.9)	最大径 (5.4)	[1.3]	施釉	回転ナデ	透明	10YR8/1灰白	微		京・信楽系
3	1	SX27	弥生土器	甕	底部	-	(8.9)	[5.6]	マメツ	マメツ	5YR7/6橙	10YR6/3にぶい 黄橙	普 4mm以下の石英・長石 を含む	良	
4	1	SX27	土師質土器	蓋	つまみ	-	-	[2.4]	回転ナデ	ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい 橙	普 4mm以下の石英・長石・ 赤色粒・金雲母を含む	良	
5	1	SX27	土師質土器		蓋部	最大径 (21.8)	(16.4)	[2.85]	回転ナデ、指 頭圧	回転ナデ	7.5YR6/4にぶい 橙	7.5YR6/4にぶい 橙	普 3mm以下の石英・長石・ 赤色粒を含む	良	
6	1	SX27	土師質土器		底部	-	(23.9)	[1.65]	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/3にぶい 黄橙	7.5YR7/6橙	普 2mm以下の長石・赤色 粒・金雲母を含む	良	底部: 陽刻
7	1	SX28	磁器		底部	-	-	[2.0]	施釉、圏線	施釉、圏線、 染付	透明	N8/灰白	微		肥前系 染付: 暗青色、 明青色
8	2	SD02	陶器	端反碗		-	(3.8)	[4.4]	施釉	施釉	透明	5Y7/4浅黄	細		京・信楽系 文様: 5Y2/2オ リーブ黒
9	2	SD02	陶器	碗		(15.9)	[7.0]	7.3	施釉、ヘラ削り	施釉	5Y6/4オリーブ 黄	5Y8/1灰白	細		瀬戸美濃系 底部に墨書
10	2	SD02	磁器	碗	口縁部	(10.6)	-	[4.0]	施釉、染付	施釉、染付	透明	N8/灰白	微		肥前系 染付: 明濃青色
11	2	SD02	磁器	碗	底部	-	(4.0)	[4.8]	施釉、染付	施釉、染付	透明	N8/灰白	微		肥前系 二重格子文
12	2	SD02	土師質土器	足釜	口縁部	-	-	[4.1]	ナデ、指頭圧	マメツ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	粗 3mm以下の石英・長石・ 褐色粒を含む	良	
13	2	SD02	土師質土器	足釜	口縁部	-	-	[4.2]	指頭圧、マメツ	マメツ	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	粗 4mm以下の石英・長石・ 金雲母を含む	良	
14	2	SD02	陶器	皿	底部	-	(3.8)	[1.1]	回転ナデ、ヘ ラ削り、施釉	施釉	5Y5/4オリーブ	2.5Y7/1灰白	細		肥前系 削出高台、砂目 付着
15	2	SD02	土師質土器	井側	口縁部	-	-	[10.5]	ナデ、指頭圧	ナデ	7.5YR6/4にぶい 橙～ 10YR6/4にぶい 赤橙	10YR6/1褐灰	普 5mm以下の石英・長石、 1mm以下の褐色粒・黒 色粒・角閃石を含む	良	
16	2	SD02	陶器	鉢	口縁部	(26.0)	-	[7.2]	施釉、三鳥手	施釉	5YR3/4暗赤褐	2.5YR6/4にぶい 橙	細		肥前系 文様: 三鳥手 (2.5Y8/2 灰白)
17	2	SD02	陶器	播鉢	口縁部	(13.4)	-	[3.2]	ナデ、凹線	ナデ、播り目	表面: 7.5YR4/1 褐灰 内面: 7.5YR4/4 褐	2.5YR6/8橙	細		堺・明石系
18	2	SD02	陶器	播鉢	口縁部	(38.0)	-	[3.5]	回転ナデ	回転ナデ、播 り目	自然釉	2.5YR5/6明赤 褐	やや粗		堺・明石系
19	2	SD02	土師質土器	焙烙	口縁部	(34.8)	-	[3.1]	指頭圧、ナデ	指頭圧の後、 ナデ	10YR5/4にぶい 黄褐	10YR8/1～8/2 灰白	精良 1.5mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	良	鏝部以下煤化
20	3	SD02	須恵器	碗	口縁部	(15.2)	-	[3.0]	回転ナデ	回転ナデ	N5/灰	N5/灰	普	良	
21	2	SD03	土師質土器	足釜	脚部	-	-	[6.85]	ナデ、剥離	-	5YR5/6明赤褐	-	普 4mm以下の石英・長石・ 金雲母等を含む	良	
22	3	SD03	陶器	碗		(9.8)	-	[4.7]	ヘラ削り、化粧 土、施釉	施釉	透明	10YR8/3浅黄 橙	細		瀬戸美濃系 化粧土: 7.5YR4/4褐 口縁部欠損
23	2	SX18	土師質土器	焙烙	口縁部	(32.1)	-	[3.85]	ナデ、ナデの 後指頭圧	ナデ、ハケ	10YR4/1褐灰	10YR5/3にぶい 黄褐	普 1mm以下の石英・長石・ 黒色粒・赤色粒・角閃 石を含む	良	外面煤化、付着 物有
24	2	SX18	磁器	碗		(8.0)	-	[2.8]	施釉	施釉	透明	5Y7/1灰白	やや粗		瀬戸・美濃系 内面に溶着物有
25	2	SX22	陶器	兵器 手碗	底部	-	(4.9)	[2.3]	施釉	施釉	透明	2.5Y8/4淡黄	細		肥前系
26	2	SX18	砥石			長さ [11.0]	幅 5.55	厚さ 3.8							安山岩製か
27	3	SK08	土師質土器	碗	底部	-	-	[1.55]	ナデ	マメツ	10YR7/6明黄 褐	7.5YR7/6橙	やや粗 5.5mm以下の石英・長 石・褐色粒・金雲母を 含む	やや 不良	
28	3	精査時	須恵器	高杯	頸部 2.6	-	-	[3.6]	ナデ(剥離)	ナデ(剥離)	N8/灰白	7.5Y8/1～ 7.5Y7/1灰白	普 1mm程度の長石を含む	不良	

〔 〕: 現存値 () : 復元値

報告書抄録

ふりがな	ほいくしょけんせつこうじにともなう まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ たけべいせき							
書名	保育所建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 竹部遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第191集							
編著者名	上原 ふみ・高上 拓							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL 087-839-2660							
発行年月日	西暦2018年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たけべいせき 竹部遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 かみはやしちょう 上林町	37201	11004	34° 17' 31"	134° 04' 31"	2017.2.6 ～ 2017.3.7	478 m ²	保育所 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
竹部遺跡	集落跡	近世	溝 土坑 柱穴 性格不明遺構	弥生土器 須恵器 土師質土器 陶磁器 石製品				
要約	<p>高松平野南部に位置する集落跡の調査。一部弥生時代～古墳時代に遡る可能性のある溝を検出したが、検出した遺構の大半は近世以降に属する。注目されるのは、条里方向に沿った大型の溝2条と、それに付随する掘立柱建物である。当該地は現在では林飛行場建設に伴い地割が変更されているが、近世段階では条里地割に沿った土地区画がなされていたことが明らかになった。近世に先行する遺物が少量確認されているため、周辺に先行する遺跡が存在する可能性はあるが、当地の利用が本格化するのには近世以降のことである。大規模な水路の開削に伴う耕作地としての利用が想定できる。</p>							

高松市埋蔵文化財調査報告 第191集
保育所建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

竹部遺跡

平成30年3月31日発行

発行：高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
印刷：有限会社 中央ファイリング